

1. 研究の背景と目的

家庭科の消費生活・環境領域では、責任ある消費について工夫することが指導内容に示され、消費生活が環境に及ぼす影響を考え、持続可能な社会の構築に繋がる行動が求められている。一方、衣料業界では、短いサイクルで大量生産・販売をする「ファストファッション」が出回り、消費者は低コストで手軽にファッションアイテムを手に入れられるようになった。そうした衣料業界の影響下で環境配慮の消費行動を行うためには、衣服の購入時に廃棄の段階までを視野に入れた購買行動が求められる。そこで、本研究では、家庭科の衣服の購入の学習において、環境配慮に重点を置いた指導内容を検討する。

2. 研究方法

現在の家庭科の教科書を中心に衣服の購入についての指導内容を確認する。そして、学内の学生を対象とし、「衣服廃棄に関わる消費者行動についてのアンケート」調査を行い、実態を明らかにする。実態調査を踏まえ、今後授業で指導する内容を検討する。アンケートは、2020年10～12月に授業などを通じて82人に配布、その場で記入、回収という方法をとった（回収率100%）。

3. 結果及び考察

(1) 衣服廃棄に関わる調査結果

新たに服を購入したい時の理由は、図1のとおりである。間々田孝夫の「消費によって実現する価値」で分類したところ、服が傷んだという機能的価値（グラフの赤の項目）もあるものの、今持っている服との組み合わせを増やしたい、外出するとき同じ服装にならないように着用していた服が似合わなくなった、年齢相応の服を着たい、自分のことをよく見せたい、流行を気にしており、追いたい、女優さんの服装を真似したい、季節の変わり目に服を新調したい、気分を変えたい、同じタイプの服をコレクションしたい、セールで安くなっている

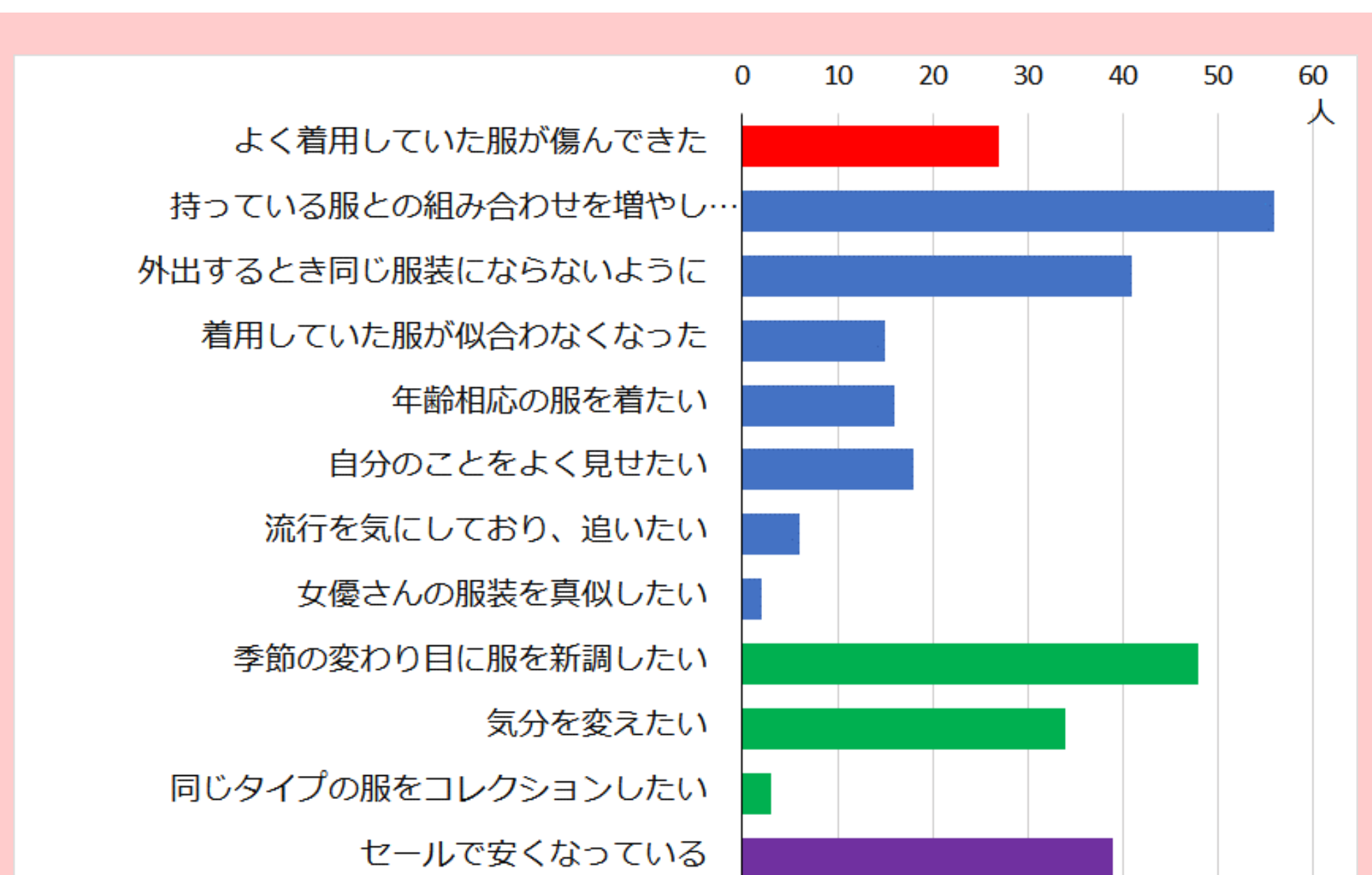


図1 新たに服を購入したい時の理由(複数回答)

さらに、季節の変わり目、気分を変えるなど文化的価値（精神的充実、緑の項目）の理由も多い。

次に、服を処分する際の決め手も間々田の分類で色分けすると（図2）、機能的価値（赤）である、破れた、傷んだという理由による処分が多いものの、着にくい、動きにくいという理由による処分もあった。また、持っている服との組み合わせがしにくい、自分に似合わなかった、時代遅れ等の関係的価値（青）による処分も少なくない。

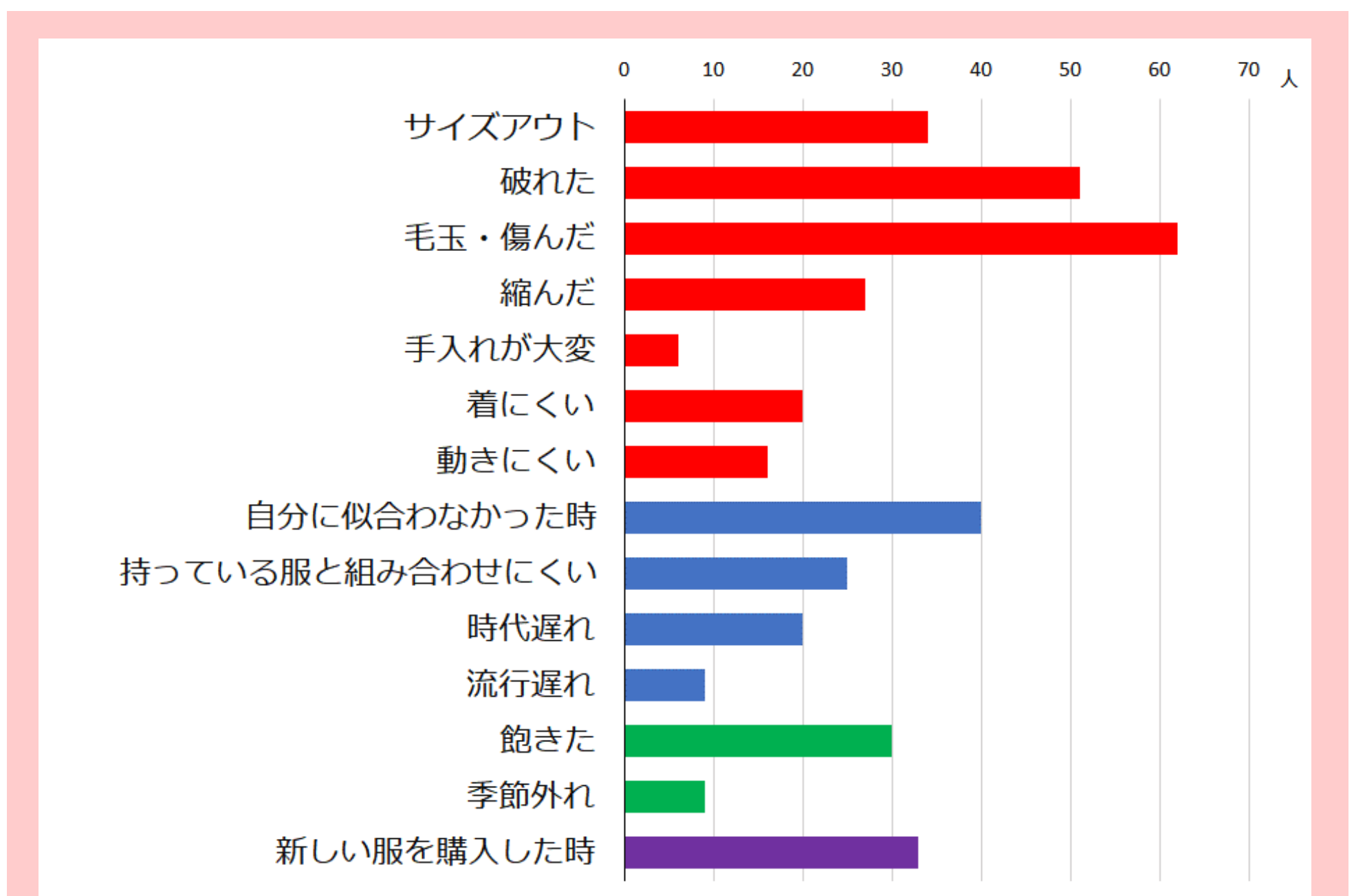


図2 服を処分する際の決め手（複数回答）

(2) 家庭科の指導内容の検討

調査結果と現在の家庭科の指導内容を検討すると、購入の際に「着やすさ」の確認など、教科書では機能面での指導が示されているが、実践に結びついていない学生もいる。「動きにくい」「着にくい」服は購入時点で確認可能であり、購入前の安易な購買行動が廃棄に繋がることを指導する必要がある。さらに、家庭科の指導では着回し、組み合わせを考えるという指導がされているが、服装に変化をつけることが、消費を促進する結果になっている。必要以上に服装の変化を求めることが過剰消費に繋がっており、環境配慮との関係で衣服の購入行動を考える指導が必要である。

4. 総括

家庭科の指導では、購入時点の安易な行動が廃棄に繋がることを考えさせる具体的な指導が必要である。さらに他者との関係に左右されて衣服購入が促進される状況に再考を促し、「物の量ではなく質にこだわること」など、良質で着心地の良い服を厳選し、長期にわたり着用することにより衣服の廃棄量を減らすなど、衣生活全体の価値を考える指導が考えられる。